



## 6 林 業

項 目	作 業 内 容
<p>(1) 乾しいたけ寒子の生産</p>	<p>(今月の作業のポイント)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○乾しいたけ寒子の生産</li> <li>○ほだ場の管理</li> <li>○植菌とほだ木の管理</li> </ul> <p>1年のうち1～2月に採れる冬菇(どんこ)が最も品質が良いので、積極的に発生管理を行って増産に努め、単価・単位収量を向上させる。寒い時期にきのこを成長させるためには、保温・保湿を図ることが必要である。乾燥と低温が続くと、せっかく芽切ったしいたけの成長が止まったり枯死したりするので、500円玉大に成長した芽に袋かけや(写真1)、ほだ木全体へのビニール被覆などを積極的に行う。採取前に袋やビニールを外し、1～2日外気にさらすと引き締まって良品となる。ビニール被覆の場合はほだ木全体を覆うので、蒸れに注意するとともに採取後は必ず外してほだ木に水分補給ができるようにする。乾燥が続いて成長が遅れている場合は天気の良い暖かい日の日中に10～15分程度散水し(写真2)、成長促進を図る。こまめに管理することで良品の分散発生となり、春子の集中発生を回避することにもつながる。古ほだは水分が不足しがちであり、釘目や鉋目を3、4箇所入れて倒し、降雨あるいは散水により給水して発生を促す。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: flex-end;"> <div style="text-align: center;">  <p>写真1 袋かけで保温と保湿</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>写真2 成長促進の散水</p> </div> </div> <p>(2) ほだ場の管理</p> <p>風の吹き込みはほだ場を乾燥させ、きのこの変形や芽の枯死を招くので、ほだ場を丹念に見回って点検し(写真3)、防風対策を徹底、保湿を図る。防風垣の設置や破れているところの補修をするほか、風の強いところは二重にするなどの対策を行う。寒波の襲来により山間部では降雪が予想されるので週間天気予報に注意し、施設の破損や倒壊など被害を未然に防ぐ。</p>

項 目	作 業 内 容
(3) 植菌とほだ木の管理	<p>スギやヒノキの人工林をほだ場にしている場合は、暗くて寒く、雨が通りにくくなりがちであるので、間伐・枝打ちを行って木漏れ日が当たるくらいにし、温度と水分がとれるようにする。</p>
	<div data-bbox="956 286 1386 604" data-label="Image"> </div> <p>写真3 ほだ場の見回り</p> <p>植菌後しいたけ菌糸を原木内にいかに速やかにまん延させるかが、栽培の成否を大きく左右する。2月から4月にかけては植菌と収穫・乾燥が重なり大変忙しくなるので、作業集中を緩和するためにも早期植菌に努める。植菌済みほだ木は高さ30cm程度に棒積みして仮伏せを確実にを行い、笠木や遮光ネットをかけるなど直射日光を防ぐと共に散水を行って水分保持に配慮する。</p> <p>種菌は水分を失いやすく、植菌後に降雨がない場合は1週間足らずで種菌の含水率が30%以下に低下し、殆ど発菌しなくなってしまう。しいたけ菌糸の蔓延が遅れると、競合する他の木材腐朽菌が優占することになる。植菌直後にほだ木全体がしっとり濡れるまで散水し、降雨がなければ3～4日に1回2時間程度散水を行い、種菌の活着を図る。仮伏せ期間は、木片駒菌では駒菌の頭部が菌糸で白くなる頃まで、成型鋸屑種菌では木口に菌糸紋が現れる頃までとし、遅くとも4月中旬には終える。</p>

(作成 林業研究センター)